



正月休みが終わってあわただしい期間がばたばたと過ぎた。妙に静かな日が続いています。そんな気持ちにぴったり合った本を見つけました。千住の爺さんのところどうだうだしてたら、「山」と書かれた本を6巻見つけた。捨てると言うのでもらうといった。それは梓書房から昭和9年に創刊された雑誌の合本で、中を見てみると、武田久吉、今西錦司、冠松次郎、尾崎喜八、木暮理太郎、坂本直行、三好達治、藤木久三・・・ざっと見て、もう伝説の人たちの青春そのままの、真々最中の元気な声が直接響いてくるものだった。丹沢からヒマラヤまで民族誌から博物誌まで豊かな幅と興行きと新しさを持っている。改めて、今出ている美しくきらびやかな山岳雑誌が一気に色あせて見えるくらいのものであった。その内容を読んでいても少しも時代の色あせを感じさせない人びとの心の豊かさがある、同じ時代を生きているような喜びを感じさせてくれた。山を歩いたあとの心はそうは変わっていないのだ。言葉の持つ力、語りかけるまなざし、湧き上がる笑い、静まりかえる静寂、吹き渡る風。それらが、文字と言う不思議な形に閉じ込められて、タイムマシンのように色あせずそこにあった。ヒトは文字の中に生き続けられるのかも知れない。

私は子供たちに「人は文字というものを発見したときに、神様の大切なものをその中に隠して盗み取るくらい、ときめきと恐れと感動あったはずだ、だから一つ一つの文字ともっとも親しくなる。」と時々言っています。言葉ができる前は存在しないものだってありました。「そら」なんてどうにもこうにも捕まえられない、がらんとしたあるの心はないのかも希薄なものに「そら」という言葉を見つけて与えたことによって、神の領域から私たちの手の中に奪い取ってきた。「風」や「こころ」も「あい」も「にくしみ」もヒトは手の内に掠め取ってきて、ころがしたり、見つめたり、考えたりできるようになった。

そんな言葉の力をこの本で久しぶりに感じました。それを捨てるなんて困ったことだと改めて思う。こういうのはみんなでぼろぼろになるまでまわして見てもらいたいものだ。本なんて、読まなければ何の役にもたない。読んでみると、場合によったら、それからの生き方が実に豊かになることだって、まあ、逆もありだが、そうあるものなのだ。だいたい、爺さん読んだのかな？などと疑いつつ興奮しています。

さて、興奮ばかりもしてられない。またバン格拉行きが決まってしまった。14日には出発しなくては、直前までは危険すぎて中止とほぼ決まっていたのだが、とりあえず現地の選挙が先送りになったので人々の興奮が少し落ち着いてきた。それでやらなきゃいけないことなら今のうちにやろうと言うことだ。と行ってみなけりゃあわかりゃあしない。何も選挙ごときで殺し合いなどしなくてもいいと思うし、酒も飲まずによくあれだけ興奮できると思うが、しらふだからもっと怖いのだろーなー。まあ、今回は話し合いや勉強会が中心ですが村も回るのでそっちは楽しみです。ゆっくり歩いてきます。たくさんの人と会えるだろう。写真もとってこないし報告書も作れないから行ったほうがいいのだが。しかし、私が会議や勉強会に出たって仕方ないのだから。現場で便所を作れとか、職人たちとやりあって何とかするなんてことはできるが、まあ、人材がいなくても思えないのだが、困ったことだ。もっとも、もっと出来る人たちはみんな自分がそんな力はないと信じてしまっているし、英語が出来ればいいというわけでもない。何をやらなければいけないのか、なにをやってはいけないのかそれがしっかりわかっていけばいいのだが思うようにいかないものだ。まっとうな男や女であればいいのだ。それが実は少なくなっているのかも知れない。今年も普通のおじさん路線をつきすもう。もう少し食べるようになろう。もう少し・・・もう少し・・・まだまだだなー。